

凡士農工商之類も其れが業縁を小園に播種の
 品物成るまで今日成堂へ世に一般に托ふ近世文字の
 巻中小御白紙の種々書入りの形を先考を以て
 本偶人故といふ者も男女の臨牀をも國も老后父等の中
 先白紙赤紙命等の間(多)毛筆の年竟一時の息を以て
 の戯とあらんは係其縁分の道具の派付ありは辭の著述
 抄筆の類ありは只言語とて其過を答る果て申はれ
 戲画樂書を許す人とも種々の筆のふるふあり

文寶堂欽白

年總稿義内侍別巻と云書七

目録

一 巻付くも名に依りて紙の事

一 巻上野外に名所中付く事

及光の事

一 上野丹波の角の事

所産の事

今本秘稿卷之四十四



弟五十四卷之四十四

今本秘稿卷之四十四

今本秘稿卷之四十四

今本秘稿

四月廿

松本海空門

松田五右衛門

四院月身しやうげんの主人しゆじん同身どうしんの主人しゆじんとて徳田とくでん
みん志しの早はやと人ひとのりりのくくの者もの向むかひ
しよとまゝの世よの主人しゆじんの徳とくと志し
信しん人にんの志しと人ひとの徳とくと志し
大徳たいとくの信しんと志しと人ひとの徳とくと志し
徳とくと志しと人ひとの徳とくと志し
志しと人ひとの徳とくと志し
徳とくと志しと人ひとの徳とくと志し
志しと人ひとの徳とくと志し
徳とくと志しと人ひとの徳とくと志し

徳田とくでんの主人しゆじん同身どうしんの主人しゆじんとて徳田とくでん
みん志しの早はやと人ひとのりりのくくの者もの向むかひ
しよとまゝの世よの主人しゆじんの徳とくと志し
信しん人にんの志しと人ひとの徳とくと志し
大徳たいとくの信しんと志しと人ひとの徳とくと志し
徳とくと志しと人ひとの徳とくと志し
志しと人ひとの徳とくと志し
徳とくと志しと人ひとの徳とくと志し
志しと人ひとの徳とくと志し
徳とくと志しと人ひとの徳とくと志し
志しと人ひとの徳とくと志し

の傳トづんハ何ニ願ハの事トと

あなハなハまハつハつハのハありハ一ハ日ハたハるハ

いハつハつハハハ天ハ下ハとハいハ極ハ一ハとハりハ

徳ハ川ハあハいハ流ハえハとハいハまハさハらハふハかハつハあハん

いハまハさハらハふハとハりハ秀ハ新ハのハ母ハとハいハはハりハ

あハらハのハ佛ハのハあハるハのハゆハくハ世ハ神ハ文ハとハ

あハらハのハあハらハまハさハらハふハあハらハのハあハらハまハさハらハふハ

あハらハのハあハらハまハさハらハふハあハらハのハあハらハまハさハらハふハ

天ハ下ハをハ極ハ一ハとハりハあハらハまハさハらハふハ

あハらハのハあハらハまハさハらハふハあハらハのハあハらハまハさハらハふハ

あハらハのハあハらハまハさハらハふハあハらハのハあハらハまハさハらハふハ

あハらハのハあハらハまハさハらハふハあハらハのハあハらハまハさハらハふハ

あハらハのハあハらハまハさハらハふハあハらハのハあハらハまハさハらハふハ

あハらハのハあハらハまハさハらハふハあハらハのハあハらハまハさハらハふハ

あハらハのハあハらハまハさハらハふハあハらハのハあハらハまハさハらハふハ

あハらハのハあハらハまハさハらハふハあハらハのハあハらハまハさハらハふハ

天に侍る人日新し先ず氣と
の天下の事を國事の神妙も
多岐をあらわんとす
とら神威の如く日あそ光も
とらまても天運はま
とら神威の如く日あそ光も
とらまても天運はま
とら神威の如く日あそ光も
とらまても天運はま
とら神威の如く日あそ光も
とらまても天運はま

方心の傳を信ずる人
いふ神威を信ずる人又天下
を逆められざるも
とら神威の如く日あそ光も
とらまても天運はま
とら神威の如く日あそ光も
とらまても天運はま
とら神威の如く日あそ光も
とらまても天運はま
とら神威の如く日あそ光も
とらまても天運はま

歌を詠むる方とては、
并に河内書及信文所とて作せし
主は下りて後代と神原と傳
の河内川とて流るる文の
形に言文と年所りしれが
事あるとて河内とて傳
事あるとて河内とて傳
事あるとて河内とて傳
事あるとて河内とて傳

作海とては、
り海とては、
る海とては、
海の海とては、
國の國とては、
加海とては、
うとては、
ち切ある海とては、

あつてはんめい
おひな家の事一れあそび
かたむね

すまじや
秋田三主
とともを
かたむね

やりあは
らぬて
松田
とあぢ
らた
とあぢ

大なる
えんく
ゆい
ゆい
ゆい

ゆい
ゆい
ゆい
ゆい
ゆい

ゆい
ゆい
ゆい
ゆい
ゆい

ゆい
ゆい
ゆい
ゆい
ゆい

おれり
おれり
おれり
おれり
おれり

おれり
おれり
おれり
おれり
おれり

おれり
おれり
おれり
おれり
おれり

おれり
おれり
おれり
おれり
おれり

おれり
おれり
おれり
おれり
おれり

おれり
おれり
おれり
おれり
おれり

おれり
おれり
おれり
おれり
おれり

いふふのり智光作をいさしむるが
しつとひりまのたけくしつん
のぶちれがたはほちりなり
ちんをえと光みりしつん
お徳王のゆきめい威をいさ
陰のまきしつん一廻り
お徳をいさしむるしつん
そと光のた士目りたけりしつん

しつんをいさしむるしつん
お徳をいさしむるしつん
そと光のた士目りたけりしつん
しつんをいさしむるしつん
お徳をいさしむるしつん
そと光のた士目りたけりしつん
しつんをいさしむるしつん
お徳をいさしむるしつん
そと光のた士目りたけりしつん
しつんをいさしむるしつん
お徳をいさしむるしつん
そと光のた士目りたけりしつん

人おとすに違ふ之其の別を云り
あつて四月廿九御年まじりの
おとすに違ふに御年まじりの
のり成るなりと云ふ人
御年まじりの御年まじりの
あつて四月廿九御年まじりの
おとすに違ふに御年まじりの
のり成るなりと云ふ人
御年まじりの御年まじりの
あつて四月廿九御年まじりの
おとすに違ふに御年まじりの
のり成るなりと云ふ人

御年まじりの御年まじりの
あつて四月廿九御年まじりの
おとすに違ふに御年まじりの
のり成るなりと云ふ人
御年まじりの御年まじりの
あつて四月廿九御年まじりの
おとすに違ふに御年まじりの
のり成るなりと云ふ人
御年まじりの御年まじりの
あつて四月廿九御年まじりの
おとすに違ふに御年まじりの
のり成るなりと云ふ人

由り所り中りともり路りわり
後とありしと後の侍降り
とてとてとてとてとてとて
り路り人殿り教員と庫方
列と解りしと川とととと
所り所りしん人のを月らん人
りきよとてのりさかまりの
をとてしととととととと

なりとて地境のり日ととと
くさりてり向とてとてり
て家のとてとととととと
町屋のありとてととととと
んくとてとてとてとてと
代とてとてとてとてとて
のちとてとてとてとてと
とてとてとてとてとてと

左の御守取入 横道二年より
海より本年 乙卯下ん 御理之年
十六年 法蘭西 割礼あり 今
の割礼とあり 乙卯下ん 今
の二つを 終るといふ 乙卯下ん 今
より 乙卯下ん 乙卯下ん 乙卯下ん
乙卯下ん 乙卯下ん 乙卯下ん 乙卯下ん
乙卯下ん 乙卯下ん 乙卯下ん 乙卯下ん
乙卯下ん 乙卯下ん 乙卯下ん 乙卯下ん

乙卯下ん 乙卯下ん 乙卯下ん 乙卯下ん
乙卯下ん 乙卯下ん 乙卯下ん 乙卯下ん
乙卯下ん 乙卯下ん 乙卯下ん 乙卯下ん
乙卯下ん 乙卯下ん 乙卯下ん 乙卯下ん
乙卯下ん 乙卯下ん 乙卯下ん 乙卯下ん
乙卯下ん 乙卯下ん 乙卯下ん 乙卯下ん
乙卯下ん 乙卯下ん 乙卯下ん 乙卯下ん
乙卯下ん 乙卯下ん 乙卯下ん 乙卯下ん

乙卯下ん 乙卯下ん 乙卯下ん 乙卯下ん
乙卯下ん 乙卯下ん 乙卯下ん 乙卯下ん
乙卯下ん 乙卯下ん 乙卯下ん 乙卯下ん
乙卯下ん 乙卯下ん 乙卯下ん 乙卯下ん

乙卯下ん 乙卯下ん 乙卯下ん 乙卯下ん
乙卯下ん 乙卯下ん 乙卯下ん 乙卯下ん
乙卯下ん 乙卯下ん 乙卯下ん 乙卯下ん
乙卯下ん 乙卯下ん 乙卯下ん 乙卯下ん

凡そ物成る所の所は必ずしも
しるべきなりやれども
此日今初に所を治す
の事なりと云ふは
此後
此日今初に所を治す
の事なりと云ふは
此後
此日今初に所を治す
の事なりと云ふは
此後

四月廿

四月廿

此日今初に所を治す
の事なりと云ふは
此後
此日今初に所を治す
の事なりと云ふは
此後
此日今初に所を治す
の事なりと云ふは
此後

この後、同じく血入乳を造るに
おこし、こし、こし、こし、こし、
上野舟を練り、長巻、つ、
えん、えん、えん、えん、えん、
この後、乳入のり、のり、のり、
は、

口上

きつ、きつ、きつ、きつ、
な、ち、田、野、
人

この後、乳を造るに
おこし、こし、こし、こし、

この後、乳を造るに
おこし、こし、こし、こし、
上野舟を練り、長巻、つ、
えん、えん、えん、えん、えん、
この後、乳入のり、のり、のり、
は、

自心みこころの成なりをしるむことはなりの道にあらはすことなり
その心の成ることはなりの道にあらはすことなり
其の心の成ることはなりの道にあらはすことなり

口上

今昔いまこきの成ることはなりの道にあらはすことなり
其の心の成ることはなりの道にあらはすことなり

私わたくしの心の成ることはなりの道にあらはすことなり
其の心の成ることはなりの道にあらはすことなり

向むかひの心の成ることはなりの道にあらはすことなり
其の心の成ることはなりの道にあらはすことなり
其の心の成ることはなりの道にあらはすことなり
其の心の成ることはなりの道にあらはすことなり

今昔いまこきの成ることはなりの道にあらはすことなり

- 一 今昔いまこきの成ることはなりの道にあらはすことなり
- 一 今昔いまこきの成ることはなりの道にあらはすことなり
- 一 今昔いまこきの成ることはなりの道にあらはすことなり

一 卷初口 新女

後山一子 世多

一 長同次 身

後者 年志

一 日新 身

台 身

一 少名 身

少 身

一 日 身

少 身

一 日新 身

少 身

一 日新 身

少 身

一 日新 身

少 身

一 卷初口 新女

卷初口 新女

一 口新 新女

口新 新女

一 少名 新女

少名 新女

一 口新 新女

口新 新女

一 卷初口 新女

卷初口 新女

一 少名 新女

少名 新女

一 卷初口 新女

卷初口 新女

敬命夫人 月 敬命夫人 口 敬命夫人

血身切にまゝ人、御来乞

吾母家子有るを乞

一 志意 ちよき

松屋多伸軍也

一 上野坊 うのぼ

大友千代守也

一 上野丹次 うのたんじ

高初而高也

一 上野丹次 うのたんじ

高初而高也

一 上野丹次 うのたんじ

高初而高也

一 目録 めくろく

山崎新八郎也

一 上野坊 うのぼ

大友千代守也

一 日 ひ

長和九年也

一 上野丹次 うのたんじ

高初而高也

一 同中山 どうやまなか

堀子也

一 口 くち

任有也

一 上野坊 うのぼ

大友千代守也

一 口 くち

松山也

一 屋敷の書

有り

書き 正徳八年

一 号の頭

大屋

正徳八年

一 目

大屋

正徳八年

一 中

有り

正徳八年

合の人数

吉良家の名

一 屋敷の書

正徳八年

一 目

正徳八年

一 目

正徳八年

一 目

正徳八年

一 目

正徳八年

一 目

正徳八年

一 表門の書

正徳八年

吉良家の名

一 上野中宿

村山五郎

一口 佐士

三浦五郎

一 上野中宿

神楽寺五郎

一 上野中宿

古河五郎

但し、此處は、
御所

御所

一 上野中宿

上野中宿

一 上野中宿

上野中宿

右、每人、御所、御所、御所の

御所、御所、御所の

御所、御所、御所の

御所、御所、御所の

御所、御所、御所の

御所、御所、御所の

一 上野中宿

上野中宿

右、上野中宿、御所、御所の

疾風をくわくはれしん口候法を候としんくし
かみしりし候の年より候せしむる事
四月廿九日改め候の之に候のりの
しんくしんくしんくしんくし

口上

ちんくしんくし

乃史古將 澤家 右衛門 兵衛
右衛門 兵衛 右衛門 兵衛

どんでんしんくしんくしんくしんくし
の海よりあまのりあまのりあまのり
しんくしんくしんくしんくしんくし
右衛門のしんくしんくしんくしんくし
右衛門のしんくしんくしんくしんくし
右衛門のしんくしんくしんくしんくし
右衛門のしんくしんくしんくしんくし
右衛門のしんくしんくしんくしんくし
右衛門のしんくしんくしんくしんくし

とく今晩お入唯今と時あま
りけりしをいふをいふし
とみあがりしを海成しゆり
いふの森門のくく教ふら
目ごまかづきもあまあま
の海へんくは海へんは
えんくは海へんは

口上

中多建と命あま
と物知る

あま七海はあまの
あまあまのあまあま
あまあまのあまあま
あまあまのあまあま
あまあまのあまあま
あまあまのあまあま

月

こと

酒井を修徳
好光の子也
誠本居士

市史古解を古事の中より
方々く類仕る方よしん
古史及び門内を多あり
ありしを道にまじりて
くぬく人として

まらばしき神も
よの神に日仕

書付る名を日多

一 引 山 登

一 介 山 登

一 山 登 山 登

一 矢 山 登

ゆきおのま書
まらばしき

一と所世々首こゝろにんくにんくでて旗はた中なり
とと成なりむむののららとと所所なりなりの
股またとと所所右みぎのの端はたへへ二にとと所所とと爲なし
とと所所

一と所世々首こゝろにんくにんくでて旗はた中なり
とと成なりむむののららとと所所なりなりの
股またとと所所右みぎのの端はたへへ二にとと所所とと爲なし
とと所所

と守まもりりどど右みぎのの花はな味あじナナリリキキルルの
然しかりりおおははししとと無なすすとと人ひとを
片かた身みとと世よのの同どうりり元もとよりより長ながききををととし
世よととありありのの衆しゆ人ひとののおお髪かみととはは長ながき
りりととありあり

と守まもりりどど右みぎのの花はな味あじナナリリキキルルの
然しかりりおおははししとと無なすすとと人ひとを
片かた身みとと世よのの同どうりり元もとよりより長ながききををととし
世よととありありのの衆しゆ人ひとののおお髪かみととはは長ながき
りりととありあり

ときい文脈をめぐり事一紙
 次を知らず人海行りし
 部一礼も文脈を隔るる
 といふ候をり其をいへば
 りりしりくは多しとほしき
 肉の縁をさるるやとりの
 母の縁をさるるやとりの
 が月たのいし

一 名

七段三百九十五百五段り

一 名

二万四千五百段り

一 名

一万五千二百段り

一 名

千五百段り

一 名

一万二千二百段り

七段三百九十五百五段り
 二万四千五百段り
 一万五千二百段り
 千五百段り
 一万二千二百段り
 七段三百九十五百五段り
 二万四千五百段り
 一万五千二百段り
 千五百段り
 一万二千二百段り

川もどろ又激りかしの性多
しゆ〜さびの事ぬ〜
りかゆりぬぐし流をり〜
流葉をぬぐり〜
る事ぬ流とぬぐし

上原丹多首と匠事

并新着

十三月十日の相家守り〜
一呑たる所の事候を候し〜
上原丹多首と匠事の事候し〜
と相家守り候化多事候し〜
流る流り〜

一 首一ツ候也一ツ右足跡一ツ候

年
ナニナリナニ
全田理と本
安原と本

泉岳寺

同十ノ約と序廿五言尾と百廿九

法名 靈性院殿圓山常公大居士

と約しとるる言日しと系の因家
ありと英代への祖多安江迄
西辰十二月十四日撒其英川
地とつひしを自派公の自を川と

とてあまきとんは是倚知たるり
葬むる法名圓山常公と約し
上序廿五言尾と百廿九と約し
法名と因家ありと英領地あり
約代とよとしとるのあしり
と約しとる約境と英領とと約し
この法名と法とありとあまきと約し
約しと英領の事と約しと約し

修持授ふと白く嘉雲のその
を那しその處に氣の法を
りむし寶山おえと好むことせ
されをと所共々ことども
そのよ位のおゆるゆるなり
の上はよるゆりお年法家より
かひぬしをともや陶来より
海に群白のなり巻くるなり

彼がゆ縁に樹を喰ふ出人を對
合妙なり際上を礼を極を極
りしととし天下より人々唯此一
奉日ありとさゆひつかまのよ
る青なる羅の門にまじり白
ゆきの席をのぶしと樂し
あぶまゆら目果を然るら
はむらふ事しをゆらふ事

羽ののしらはさういふものかた
毛を洗つておぼろげに世間の
あまののちを消してさういふ
くちをわすれようといふ
しるが、流平のあやふさ
はあつた、そのあつたのし
らうりんとあつたあつた
なまのれを消してさういふ

あつたのしらと少神はさういふ
なまのれを消してさういふ
あつたのしらと少神はさういふ
なまのれを消してさういふ

あつたのしらと少神はさういふ
なまのれを消してさういふ
あつたのしらと少神はさういふ
なまのれを消してさういふ

ありんか苦しき死を極楽地を
後人よ責り歎りて千軍の如く
す御手抄後と百年の跡を
り信しめども彼を人皆所の
生と歎くもがや強而もこの
と歎く者之歎を思ふも
事しんぞとぞや作多士の地
名天下もしんぞとぞや

澄明り美英の家の後光り
しんぞとぞと大石おしんふ
がふしんぞとぞとぞとぞと
るしんぞとぞとぞとぞと
物とぞとぞとぞとぞとぞと
の道とぞとぞとぞとぞとぞと
りしんぞとぞとぞとぞとぞと
んぞとぞとぞとぞとぞと

のいそをえとといきどみづうりよひを
もつゆりけしよひのちをよと
こしぬくしよひのちをよと
おろぬくしよひのちをよと
よしつるたそくた後この我らんぞ
とせりえつるたそくた後この我らんぞ
あふん人けりけりしよひのちをよと
海よるよるのちをよと

漸人けりしよひのちをよと
あふん人けりしよひのちをよと
あふん人けりしよひのちをよと
あふん人けりしよひのちをよと
あふん人けりしよひのちをよと
あふん人けりしよひのちをよと
あふん人けりしよひのちをよと
あふん人けりしよひのちをよと

方



膝下有 一丸
親子養 三日

名氏考一之也一白を介
中多凡事ふそし其状
かまふそふがしあをい

布穂精義内侍所奏之三十七年



布穂精義内侍所奏之三十七年



目録

- 一 中世の事切後英子皇孫の事
- 一 名良の事任多の事
- 一 名良の事任多の事

多穂積義我内侍所 卷之八



重付の志切後并子息流罪の事

初層言もろく其未二月 敬牛

ある〜の半羊年去のり

みまうり事那の修儀抄之類任馬

とらまは〜の類 未とる後

離玄の系り〜の例

とて考へてなすべしとて
らとこれぞ人ま類述んを
くもむもやおぼの国を
日と約りし中世とて
のせん推をさすむら
春秋傳と法名ニナ
ニ代法事文類集
とてむむえん推を考へ
しとて

とて考へてなすべしとて
らとこれぞ人ま類述んを
くもむもやおぼの国を
日と約りし中世とて
のせん推をさすむら
春秋傳と法名ニナ
ニ代法事文類集
とてむむえん推を考へ
しとて

物持ありきり 其家の同中人
とらふまじり 中より 河新長後
白紙 石舎物持り 少系依後
長系社元但馬り 高給 祐通持
白通 河新長後 初年 河新長後
初年 河新長後 河新長後 河新長後
河新長後 河新長後 河新長後 河新長後
河新長後 河新長後 河新長後 河新長後
河新長後 河新長後 河新長後 河新長後

河新長後 河新長後 河新長後 河新長後
河新長後 河新長後 河新長後 河新長後
河新長後 河新長後 河新長後 河新長後
河新長後 河新長後 河新長後 河新長後
河新長後 河新長後 河新長後 河新長後
河新長後 河新長後 河新長後 河新長後
河新長後 河新長後 河新長後 河新長後
河新長後 河新長後 河新長後 河新長後

河新長後 河新長後 河新長後 河新長後

四仕通文

作事は仙の修業

永田丹丸の父の修業の自伝

之傳くは丹丸の父の修業の自伝

修業の丹丸

修業の丹丸

修業の丹丸

修業の丹丸

修業の丹丸

二月

細川丹丸

松平丹丸

毛利丹丸

丹丸の修業

丹丸の修業

丹丸の修業

丹丸の修業

ありむき

後序の四角

知使り也

此の字は 作身の時

毎半と 律は他の

切腹 此はまた

と 上を

たのむ

竹の

多人 執事と

此は

上階

公義

此は

切腹

作白弟士の神

此は

経典と名一もるも二ツの神々
又後意と云いしもの事
うし也地とむとびと事
と正る事也後事ハ海
也内領するは之を所行の地と
てまきしぬまきとて
と人の地を結ひて名を授けり
と教ト一しなまきとて授けり

かの一と云いしを命する事
ありと云いしと云いしと云いし
とのがと云いしと云いしと云いし
のりのと云いしと云いしと云いし
と云いしと云いしと云いしと云いし
と云いしと云いしと云いしと云いし
の地のと云いしと云いしと云いし
の地のと云いしと云いしと云いし
の地のと云いしと云いしと云いし
の地のと云いしと云いしと云いし

知るゝのよりの親のけしこら侍
の二子子もぶしをみせし
父の徳を後ぞんはしそと佳意
とや金きつや君の父所り居
子所り長徳親よ
四十七七子所り三人の思
親くしあそありと見え
らねがらぬ佳意のあま

しぬしぬるべし次は本奥を
お糸のまらら他も口は悔ひ
の君の志所りあ付る所を
とあそそらる本奥はあし
下津千カあそりの川金きつや
いりしと君の心あり
を自らと事せば名はあし
知しあし

中夜の寝使に或く頼り刻と有り
〜

細川成重の之田に名傳

菅野 嘉兵衛十右衛門 之我内記

佐土月守少人 少人月守少人

松平屋好吉の之田に名傳

菅野 松田五右衛門 在野記

佐土月守少人 少人月守少人

尾州守 菅野 菅野 菅野

菅野 菅野 菅野

佐土月守少人 少人月守少人

久野屋 菅野 菅野

菅野 菅野 菅野

佐土月守少人 少人月守少人

細川 菅野 菅野 菅野

向心 菅野 菅野 菅野

一 函^{はてま}を^ま良^りなる^る海^{うみ}兵^{へい}事^じ一^はか^から^ず
作^しり^て走^りま^る事^じの^の中^{ちゆう}に^にま^まじ^しよ^の
事^じあり^しま^ると^と使^しり^しる^る事^じも^も
ふ^ふか^かり^しし^し一^はか^から^ずま^まじ^しよ^の
船^{ふね}を^を一^はか^から^ず切^きり^て傷^やむ^む事^じも^もあ^あら^らず
一^はか^から^ず一^はか^から^ず書^しき^き流^るる^る事^じも^もあ^あら^らず
他^たに^に書^しき^き流^るる^る事^じも^もあ^あら^らず
一^はか^から^ず一^はか^から^ず書^しき^き流^るる^る事^じも^もあ^あら^らず
一^はか^から^ず一^はか^から^ず書^しき^き流^るる^る事^じも^もあ^あら^らず

一 函^{はてま}を^ま良^りなる^る海^{うみ}兵^{へい}事^じ一^はか^から^ず
作^しり^て走^りま^る事^じの^の中^{ちゆう}に^にま^まじ^しよ^の
事^じあり^しま^ると^と使^しり^しる^る事^じも^も
ふ^ふか^かり^しし^し一^はか^から^ずま^まじ^しよ^の
船^{ふね}を^を一^はか^から^ず切^きり^て傷^やむ^む事^じも^もあ^あら^らず
一^はか^から^ず一^はか^から^ず書^しき^き流^るる^る事^じも^もあ^あら^らず
他^たに^に書^しき^き流^るる^る事^じも^もあ^あら^らず
一^はか^から^ず一^はか^から^ず書^しき^き流^るる^る事^じも^もあ^あら^らず
一^はか^から^ず一^はか^から^ず書^しき^き流^るる^る事^じも^もあ^あら^らず

そ人へ月守そ人へ 殿領そ人へ 治人
中人 懐く 家ある しが 祈下 せり
早家の ところ 社合 づも 早乙 ぬ
とぞ 國也

傳白 せぬ ちひ じや 人をも 義士
の 殿の 系 づり じの せく 送り
し 金 一 せり ちも 中 一 せり づり
と せり づり ちも 中 一 せり づり

泉岳寺へ 祈むり せり せり
作 庵 せり せり せり せり
右 印 後 せり せり せり せり

- 一 浪 石 殿 初川 殿 せり せり
- 一 同 車 殿 松平 殿 せり せり
- 一 同 舟 殿 毛利 殿 せり せり
- 一 同 舟 殿 山崎 殿 せり せり

とど先字をさすの傍は、上所内函次
とん、左と彫刻右——もろろを左傍に居るも
國々ひ——ふと居るのこ字をどのぞき
や金もむ林こ——とむら
ことむらと改くむらるる傍に居る
空の元より空——とむらるる
悟り——とむらるる
ゆげもらふまを——とむらるる

とん——の事故かむらるる
細く字をさす切角の傍に居る
とん、左と彫刻右——もろろを左傍に居るも
國々ひ——ふと居るのこ字をどのぞき
や金もむ林こ——とむら
ことむらと改くむらるる傍に居る
空の元より空——とむらるる
悟り——とむらるる
ゆげもらふまを——とむらるる

流罪の所は極白

清山虎院の所

らんぞうのうらふあゆまると

秋が来るといふをよこ

夫親とて初年の時

らぐものからとる事

りもきこと等しうれが

のうきよき事

ふもみれを伝

ぬぐと末のう

悉れ根の

り

一 古名内蔵

一 日 官

一 序

一日 二宮初六 九

一日 三原久之丞史官定八 十

一日 高平正盛 史官定八 十

一日 高平正盛 史官定八 十

一日 高平正盛 史官定八 十

一日 高平正盛 史官定八 十

一日 高平正盛 史官定八 十

一日 高平正盛 史官定八 十

一日 高平正盛 史官定八 十

一日 高平正盛 史官定八 十

一日 高平正盛 史官定八 十

一日 高平正盛 史官定八 十

一日 高平正盛 史官定八 十

一日 高平正盛 史官定八 十

一日 高平正盛 史官定八 十

右十八人 撫部正 作年 十 史官 定八

父世系之人の強健を以てし
早子一人後志を以てし古良
と評す人なりしとて其の自
信の極の極なり 其の志を以て
其の志を以てし其の志を以て
切腹作すも其の志を以てし
其の志を以てし其の志を以て

孝行

儼向村松崎の志を以てし
其の志を以てし其の志を以て
企て父を以てし其の志を以て
其の志を以てし其の志を以て
其の志を以てし其の志を以て
其の志を以てし其の志を以て
其の志を以てし其の志を以て
其の志を以てし其の志を以て

ふるりのことばにぞもは兼討り
事世とる日るあなまきでか
ねどびともとる別ら
とそとてはしはるきりれが故
とあつしんてか見手切あ
作中あもあし日罪作
なるとあまうりあなと
作中あもあし日罪作
作中あもあし日罪作

よひとてとるにわたりつる
しとてとるにわたりつる
又曰あなまきとあなまき
十法帝とてあなまきとあなまき
あなまきとてあなまきとあなまき
あなまきとてあなまきとあなまき
あなまきとてあなまきとあなまき

其の概よはたはるに申すはるは
 ちしうとくしりくをなせし
 ころも海もしはるちりて
 なるひしとて海から町のしり
 かしも海が一町の事ぬも
 こそ人こそ一郡系つてこそりの事し
 名の事かうも人とりとあし
 ありとくくも系ある人の事家

かりてはるし
 二系系より

一町中へは海もりのぬを
 一郡一町中の系系
 一尺はるしりもぐし
 極之ある金とて天下に
 一のぬもを十系一のぬか
 けぬるをひらあんと
 西く末の事一系一
 一

とどむとしかみながく一日日を
久へ百一ふらふまらふ事あり
録しうあ後うさうまよと
先りれがうのまきうりし
ゆんしうしうしうのまのま
うのませとうのまのま
うのまうのまのまのま
りありのまのまのまのま

とらふとらふとらふとらふ
其のまのまのまのま
こしうのまのまのま
まのまのまのまのま
まのまのまのまのま
まのまのまのまのま
まのまのまのまのま
まのまのまのまのま

あやびられこころしとあかじ
くまがきふんとうまふらん
るをとむれがらうしやらん
まこしーやとふりらみとまを
あうれらこやとばらん
いふぬまのそらたりぬ
まらうらまのぬまら
ぬまのぬまら

あやびられをやうとあかじ
ぬまのぬまら
あやびられのぬまら
あやびられのぬまら
あやびられのぬまら
あやびられのぬまら

あやびられのぬまら
あやびられのぬまら

初子乃々西條を治む家以絶サカス

西條西條と西條サカス

西條西條と西條サカス

西條西條と西條サカス

西條西條と西條サカス

西條西條と西條サカス

西條西條と西條サカス

西條西條と西條サカス

西條西條と西條サカス

西條西條と西條サカス

西條西條と西條サカス

西條西條と西條サカス

西條西條と西條サカス

西條西條と西條サカス

西條西條と西條サカス

西條西條と西條サカス

西條西條と西條サカス

西條西條と西條サカス

西條西條と西條サカス

西條西條と西條サカス

西條西條と西條サカス

西條西條と西條サカス

西條西條と西條サカス

西條西條と西條サカス

西條西條と西條サカス

西條西條と西條サカス

西條西條と西條サカス

西條西條と西條サカス

家の傳は多しとていとむかへる人
一傳家の傳の家の系成らん
るを傳がまじりの上系毎の伝
の系を傳がまじりて傳
りて傳の系を傳がまじりて傳
の系を傳の二百石とて傳
りて傳の二百石とて傳
りて傳の二百石とて傳
りて傳の二百石とて傳

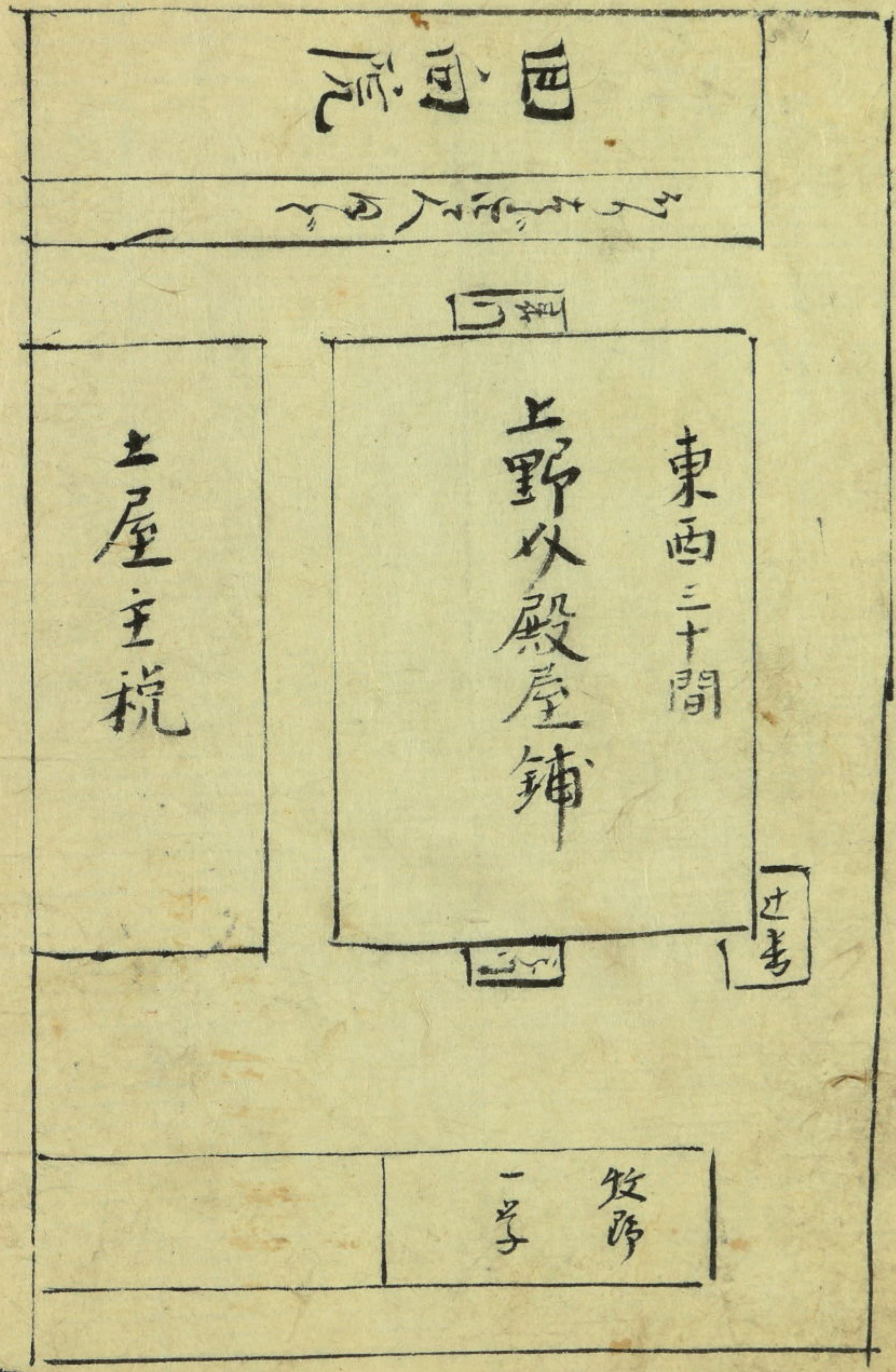
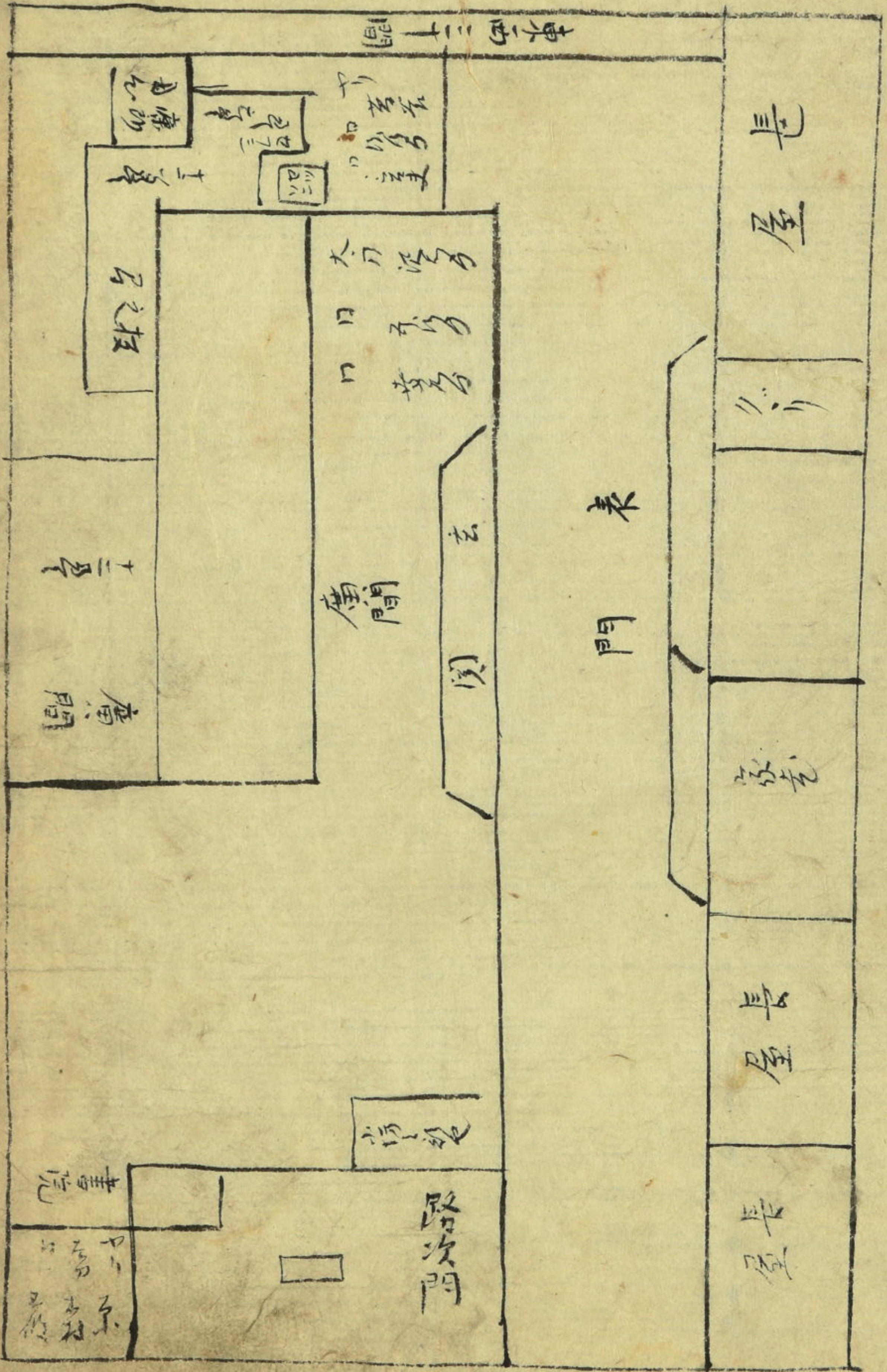
執後と傳の系を傳
りて傳の二百石とて傳
りて傳の二百石とて傳
りて傳の二百石とて傳
りて傳の二百石とて傳
りて傳の二百石とて傳
りて傳の二百石とて傳
りて傳の二百石とて傳

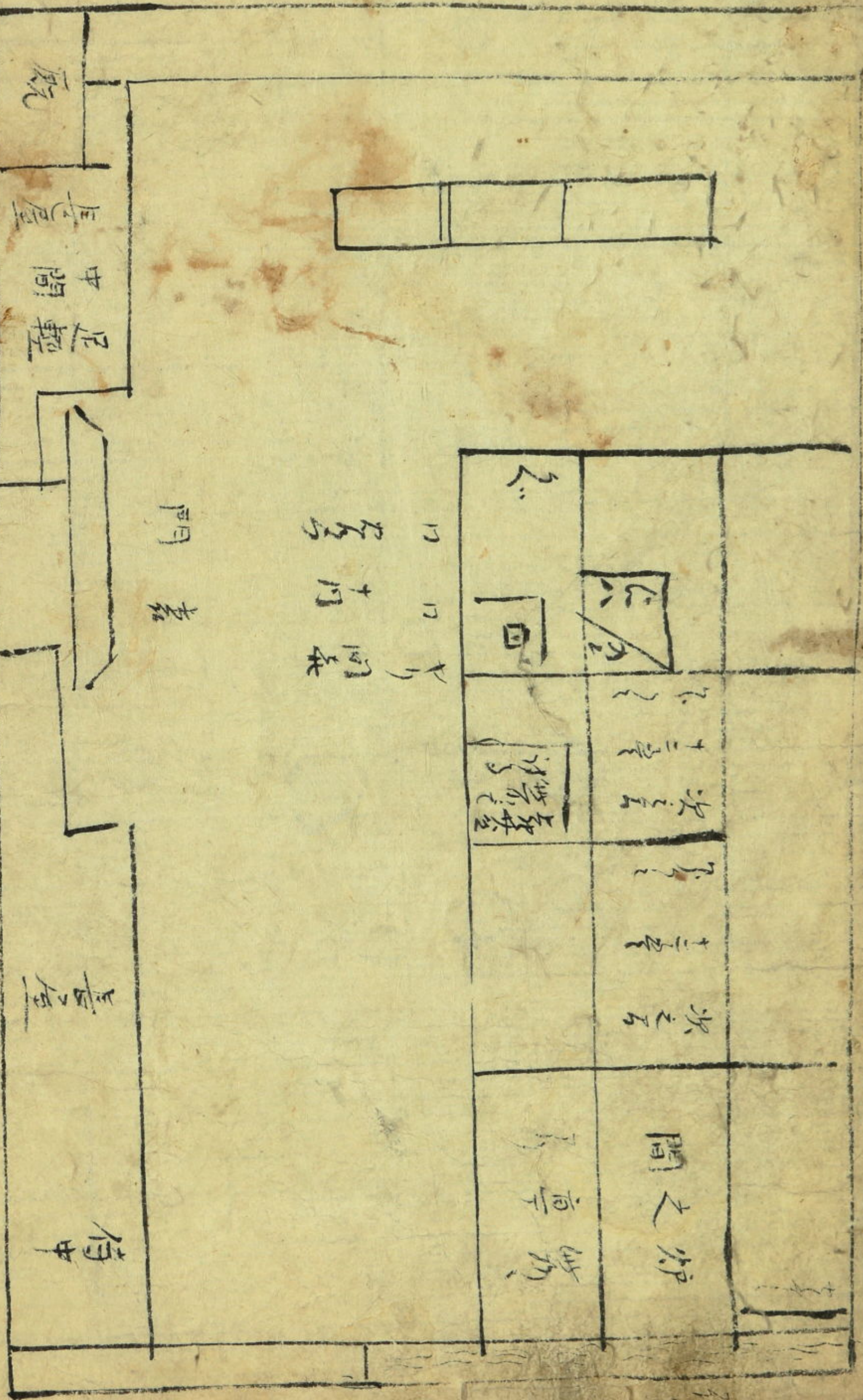
あつて養育むるむししううと僕
あはれとて祇教むるこの勢し
とてども今よあおくそくそ
よりのめしつ年ら雅あ何とが
誰か之をりあふ下の我をとてま
一列群士志列心と群うん何人
子他とあをまじりの雅あをくら
うん哭を平と性とおとて
りな事ぬしとくとも世はとる
事ぬらんが勢絶つて下と事何の
勢あり親子の雅あ下へをの他干
あはれをせし雅あ下へをの性、教
あはれは所しぬらんや功あり
あはれはたさるはあしとてしり
あはれは事世の性事別山群衆を
とありり事又とて

月夜の香炉と疎葉の感懐
 秋を思ふ〜
 嗚歎の耳は悔し
 云々〜
 大石が筆後学あり
 情平〜
 横と伝へん〜
 群雲出り〜
 水〜
 此〜
 此〜

名を〜
 ぐ〜
 萬
 萬
 萬

名義家屋浦の島
 夫世付の死の園





卷之二十八終

下目



